

# 神様のなせるわざ？ ～五ヶ瀬川をのぼって～

岐阜分室 主事 鷲見 昌子  
研究第三部 主事 和田 明美

宮崎空港からJR日豊本線で延岡へ。そこから五ヶ瀬川を縫うように走っている高千穂鉄道で終点の高千穂駅までは約80分間の汽車の旅。秋色にもえた山々や深い空、車窓から目に入る風景はどの幕も素晴らしく、決して私たちを飽きさせることはありませんでした。鮎梁・八戸観音滝、そしてこの線の一番の見所でもある東洋一高いと言われている高千穂鉄橋（高さ105メートル、長さ354メートル）等と名所付近では徐行運転がされており、簡単な説明のアナウンスが流れます。一緒に乗り合わせた女子学生の柔らかない宮崎弁、素朴なスニーカーと白いビツタリとしたソックス。ホッとした気分させる鉄道でした。



この旅の目的の一つである五ヶ瀬川は宮崎県と熊本県を分ける九州山地の向坂山付近から始まり宮崎県の北部をいったん北上したあと、南東に下りながら日向灘にそそぐ幹川流路延長106キロメートル、流域面積1,820平方キロメートルの一級河川です。この川の名前の由来は上流から吐ノ瀬、窓ノ瀬、あららぎノ瀬、綱ノ瀬、大瀬と五つの瀬があることからその名がつけられました。また、河口に位置する延岡市は今や南九州第一の工業都市にまでなっていますが、それはこの五ヶ瀬川の豊富な水量が発電に利用されたのが最大の原因であるといわれています。

さて、旅の初日の夜、高千穂駅に着いた私たちは宿の人に勧められるがままに夜神楽を見に行きました。高千穂地方で伝承されている神楽は、天照大神が天岩戸に隠れられた折に、岩戸の前で天細女命が面白い調子で舞ったのが初まりとされており、毎年11月の末から翌年の2月にかけて各村々で33番の夜神楽を実施して秋の実りに対する感謝と翌年の豊作を祈願するもので、その内の4番が毎夜8時から高千穂神社の境内の神楽保存館で公開されています。宮司さんがそれぞれ1番づつの舞の意味を説明して下さるのですが、中には「子供には見せられない」とおっしゃった番がありました。はて？と興味深くその舞を見てみると「んー、なるほど」と納得。夫婦円満の姿がおもしろおかしく表現されており、とても神社でなされているとは思えないほど人間的な営みとして感じられました。

次の日、私たちはこの旅のもう一つの目的地である高千穂峡を訪ねました。高千穂峡とは高千穂の中央部を流れる五ヶ瀬川が阿蘇火山噴火の堆積溶岩を浸食したことによ

て生まれた、深いV字型の渓谷です。これは国の天然記念物にも指定されているもので、柱状節理をみせる断崖の高さは80メートルから100メートルともいわれます。そそり立つ岸壁の間を進んでいくと自然の力を思い知らされるような数々の渓谷が展開されており、中でも柱状に浸食されてできた岸壁は圧巻で、自然にしかできない独特な力強さを感じました。遊歩道を先に進み、渓谷の中流部にさしかかると水面より約17メートルの高さから地下水が落下している「真名井の滝」が姿を見せます。日本の滝100選にも選ばれているこの滝の由来



は、天孫降臨の際この土地に水がなかったため、天村雲命が再び天上に上られ水種をこの水源に移されたと言えられており、この水源が地下水となって高千穂峡に湧水するといわれています。ここではボートに乗ってその滝の姿を間近で見ようとしたのですが、なにぶんにも生まれてから今までボートを漕いだことのない細腕の娘？2人漕いでも漕いでもボートは望む方向には進みませんでした。それでもやっとの思いで滝の近くまで漕ぎ着け、オールの手を止めてひと休み。サラサラと落ちてゆく水、深い緑、そしてシンッとした空気をからだ全体で感じ、時を越えたとても神秘的な空間に浸ることができました。

高千穂峡を後にし、さらに五ヶ瀬川上流部に向かう途中、長く続いた穏やかな山の風景が突然変わり土砂崩れの跡。

流されてきたのであろう大きな木の株などが道端に横たわりとても険しい光景でした。

運転者さんに聞くとこの夏の暴風雨と台風による被害なのだそうです。ここでもまた自然の威力の強さを感じました。

これもまた神様がなされた事なのでしょうか。

